

2022 年度

国際政治経済学部

総合型選抜Ⅰ期(英語資格型)入試

【小論文】 サンプル問題

60 分 100 点

総合型選抜 I 期（英語資格型）入試 【小論文】 サンプル問題

次の文章を読んで、以下の各問いに答えよ。

日本自動車工業会が今秋の東京モーターショーの開催中止を決めた。一方、中国で開催中の上海国際自動車ショーでは、自動車産業の構造変化を予感させる出展が相次いでいる。主役となっているのが電気自動車（EV）だ。日本勢には EV 時代の到来を見越した戦略の転換を求めたい。

上海では、日本勢でもトヨタ自動車やホンダが意欲的な新車の投入計画を表明した。それでも目立つのは中国企業の勢いだらう。

中国企業は自国で生産合弁を組む日米欧のメーカーから、様々な形で技術移転を進めてきたものの、複雑な構造を持つガソリン車では追いつくのが難しかった。だが、部品点数が大幅に減る EV となると、中国企業は侮れない存在となることを認識すべきだ。

中国では急激な価格破壊が起こり、国内で売られる EV の 4 分の 1 は 10 万元（約 170 万円）以下とみられる。日本で言えば軽自動車にあたる価格帯だ。

日本の自動車メーカーが価格競争で消耗するのは、できるなら避けたい。より重要なのは、EV がもたらす構造変化への対応だ。

EV は完成車メーカーを頂点とするピラミッド型の産業構造まで変えようとしている。日本勢は 3 万点に及ぶ部品の「擦り合わせの妙」を競争力の源泉としてきたが、構造が簡素な EV では大胆な国際分業が起きつつある。

その波頭は日本にも及んでいる。佐川急便は国内で保有する 7200 台の軽自動車を、2030 年までにすべて EV に取り換える。佐川に EV を供給する日本のスタートアップは設計と開発だけを手がけ、車両の生産は中国の広西汽車集団に委託する。

生産と設計・開発の分離というパソコンやスマートフォンで起きた現象が、すでに自動車産業にも押し寄せているのだ。世界最大の自動車市場を抱える中国企業にとっては規模の経済性を発揮しやすい。ハードだけでなく自動運転の社会実装でも一歩リードする。

日本の自動車メーカーに構造変化への備えはあるか。国内でいち早く普及させたハイブリッド車に頼り続けていては、「イノベーションのジレンマ」に陥りはしまいか。

EV 時代に何を強みにすべきかを、日本の自動車産業はもう一度問い直してほしい。100 年に一度の大転換を成長の好機にする必要がある。

（『日本経済新聞』社説 2021 年 4 月 23 日「中国製 EV が促す構造変化に備えよ」より。）

問1 電気自動車（EV）がもたらす自動車産業の構造変化について、本文の内容を参考にして、200字以内でまとめなさい。

（解答のポイント）

キーワードについて、本文にどのようなことが書いてあったかを確認する。

「電気自動車は、自動車の構造が簡素であり、ガソリン車などに比べて、部品点数が大幅に減る。」

「生産と設計・開発の分離という現象が、自動車産業に押し寄せてきている。」

⇒「中国企業はこの分野で侮れない存在となる。」

「中国では電気自動車に関する急激な価格破壊が起きている。」

これまでの構造を書いた上で、いま進んでいる構造変化について書くのもよい。

問2 日本の自動車産業の「強み」は何であったか、本文の内容を参考にして、100字以内で説明しなさい。

（解答のポイント）

キーワードについて、本文にどのようなことが書いてあったかを確認する。

「ガソリン車は複雑な構造を持つ」

「日本勢は3万点に及ぶ部品の『擦り合わせの妙』を競争力の源泉としてきた。」

問3 あなたの「強み」はどのような点であると思いますか。あなたの経験など具体例を示しながら、500字以内であなたの「強み」を説明してください。

（解答のポイント）

自分の強みがどのような点であるかを考えた上で、「なぜそれが強みであるのか」、

「それが強みであることを示せる具体例」といった「根拠」の部分丁寧に書く。